

ウトナイ湖のガン類保全に関する課題の検討

田尻浩伸（公益財団法人日本野鳥の会自然保護室）

北海道苫小牧市のラムサール条約湿地・ウトナイ湖は面積 275ha、平均水深 0.6m の湖沼で、石狩湾から太平洋に至る石狩低地帯南部に位置する。一帯は勇払原野と呼ばれる北海道三大原野のひとつとして知られ、水鳥を中心に多くの野鳥が生息する重要野鳥生息地（IBA）となっている。ウトナイ湖に飛来する水鳥類は秋と春に多く、越冬するのはオオハクチョウやオナガガモ、ホオジロガモなど限られた種である。マガンを初めとした多くのガンカモ類には、ウトナイ湖はおもに中継地として利用されている。

飛来するガン類の最大個体数は春の渡りの際に記録され、国内飛来数が増加するにつれて増えてきたが、このところ記録される最大個体数は数万から 10 万羽前後となっている。マガンを含むガンカモ類の保全のためには、ねぐらとなる湖沼と周辺の採食地を保全していくことが重要である。春にウトナイ湖でねぐらを取るガン類は、渡来以降雪融けに合わせて採食地を移していき、概観するとウトナイ湖の東に位置するむかわ周辺から厚真、植苗と変わっていく。その後、ウトナイ湖の北の千歳北部や長沼などに採食地が移り、この頃に個体数が最大となる。

ガン類の採食地の環境は水稻、畑作物やデントコーンなどの飼料作物が栽培された農耕地である。ウトナイ湖周辺の自治体における水田作付面積は減少傾向にあり、今後の採食環境の変化が注目される。採食環境、特に水田環境の維持を進める仕組みとして生き物ブランド米を確立する例がある。これに加え、来年度から環境省が本格的に事業を開始する「自然共生サイト（仮称）」が活用できるかもしれない。自然共生サイト（仮称）は、2030 年までに陸地、海域の 30% を保全する 30by30 目標達成のために導入されるもので、サイト認定された際のインセンティブについての検討が進んでいる。近年、企業も生物多様性への貢献を積極的に広報しており、この 30by30 の取り組みには上場企業も注目していることから、うまく活用することができれば採食環境の保全に役立てられるかもしれない。

また、2050 年のカーボンニュートラル達成のため、風力発電や太陽光発電などの再生可能エネルギーの導入が進められている。改正温対法に基づいて市町村は「促進区域」を設定できるようになり、促進区域では導入促進のためにアセス手続きの一部省略などが行われる。したがって、採食地周辺部やねぐらと採食地を結ぶ経路など、ガン類の生息に重要な場所を把握しておき、ゾーニングが行われる際には適切に反映されるように情報提供していくことが重要になっていくと考えられる。

環境省 30by30 サイト：<https://policies.env.go.jp/nature/biodiversity/30by30alliance/>